

郷土資料編（葦加地区）昭和四三年九月廿九日

第二十回史跡めぐり（葦加）

大田

越谷

越谷市郷土研究会

第二十回史跡めぐり資料

草加地区

昭和四十三年九月廿九日

越ヶ谷市郷土研究会

コース案内

越谷駅

草加駅

源 矢

東福寺

神明神社

松並木

札幌河岸

大川家

越谷

明治天皇御駕泊所

草加せんべいの由来

東福寺の開基 大川因書が慶長十一年大川家のため建立す

草加の松並木 真州街道の両側に一五キロメートルにわたる

綾瀬川や中川の舟遊

明治天皇が草加橋へ御泊りになった

草加駅市神 神明宮

② 草加せんべいの由来

伝説によれば、松原（米町）の茶店で売り残りの「だんご」の処分に困っていたところ、たまたま茶店に立寄った旅の武士が、茶店の老婆に「だんご」を乾燥させて、焼きあげ、保存する方法を教えたことから始まったと伝えられている。

旅の武士がヒントを与えたのが、茶店の老婆の創意工夫によったかはともかくとして、老婆が「おせん」であるところから「せんべい」の名が生まれたということである。「せんべい」発祥の地は、へんぴな松原の茶店であると言われているが、土曜の入々はこの話を、両手の向いい伝えてきたのであるから、何か根拠のあったことであろう。

○ 東福寺が創建された。

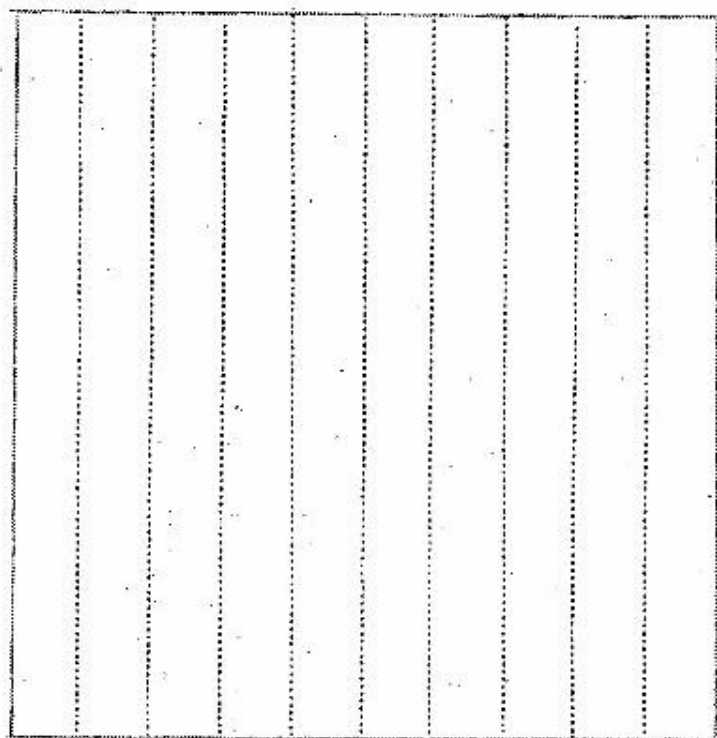
東福寺は草加宿を開いた大川國書が、慶長十年（天○五）主として大川家のために建てた持で、大川氏が江戸時代には手厚い保護をあたえていた。

開基の大川國書は、元和五年（一六一九）三月十三日に

没している。

この寺には、文化財として価値のある江戸時代の有名な書家であった「澁田興根」の書が墓石に刻まれている。又東福寺の元祖として知られている 石井宗寂を、弟子や家人たちが集めて供養した「碑」が建てられており、その碑には、次のような俳句が刻まれている。

○ もろ島もさえずる春の手向けかな



◎ 草加の松並木

興州街道の両側、一五キロメートルにわたって四百本余りの松が植えられ、江戸時代のころ、旅人に親しまれて来たが、この松並木は、天和三年（一六八三）に、綾瀬川を掘さくした後、街道の両側に植えられたものであろう。

植えられた年代を知る記録もないが、今ある松は樹齢も若く、明治時代に植えられたものが多く、古木でも樹齢はおおよそ二〇〇年ぐらいであろうと推定されている。

◎ 綾瀬川や中川の舟運

一 綾瀬川

江戸時代のころから、舟運は盛んであったが明治に入っても舟運に利用されていた。即ち綾瀬川に草加町、浦ま利柏崎村、香岡村の四ヶ町村に川岸があった。

草加市域には、魚屋川岸（手代町）と札幌川岸（御田町）の二ヶ所に川岸があり、とくに魚屋川岸は賑わっていた。

磯浜から大正にかけて、回送船を営んでいた家は魚屋川岸札幌川岸にはそれぞれ一軒ずつあった。磯屋宗吉は、米や

麦などの産物を東京の浅草川岸に運び、東京からは日用品雑貨などを運んだ。

これらの舟は草加の荷物だけでなく、若槻の方まで運ぶていき運送を営んだのである。綾瀬川は冬の間に、水がかれるので若槻と東京間の往復は、水置の多い長年に行われた。

明治三十二年になって東武鉄道が開通し、今まですべて舟で運送していた物資も鉄道で送られるようになり、大正初年の震災を境いにして、すっかり綾瀬川の舟運は衰えてしまった。

綾瀬川に通航していた舟（明治三十年）

石数	船数	係留地	石数	船数	係留地
七〇	六	(南草加)	七〇	一	(沼橋家)
五六	九	(南草加)	五六	二	(谷古守)
四五	五	(南草加)	四二	三	(谷古守)
二八	五	(南草加)	二八	三	(谷古守)
合計	三九二	船数	三四		

二、中川

中川の舟運は柿木川岸より、荷物の積みおろしを行い、東京方面と連絡しており、鉄道の発達しなかつたこの地方では、よく利用されていたようである。

明治九年には、柿木村の舟籍を保持していた舟は五〇石位のもので、(一) 伝馬船 (二) 小舟 (三) である。

○ 明治天皇が草加宿へ御泊りになった

明治九年(一八七六)四月、明治天皇は東北地方の御視察を思い立たれ、同年六月二日、東京を御出発になった。

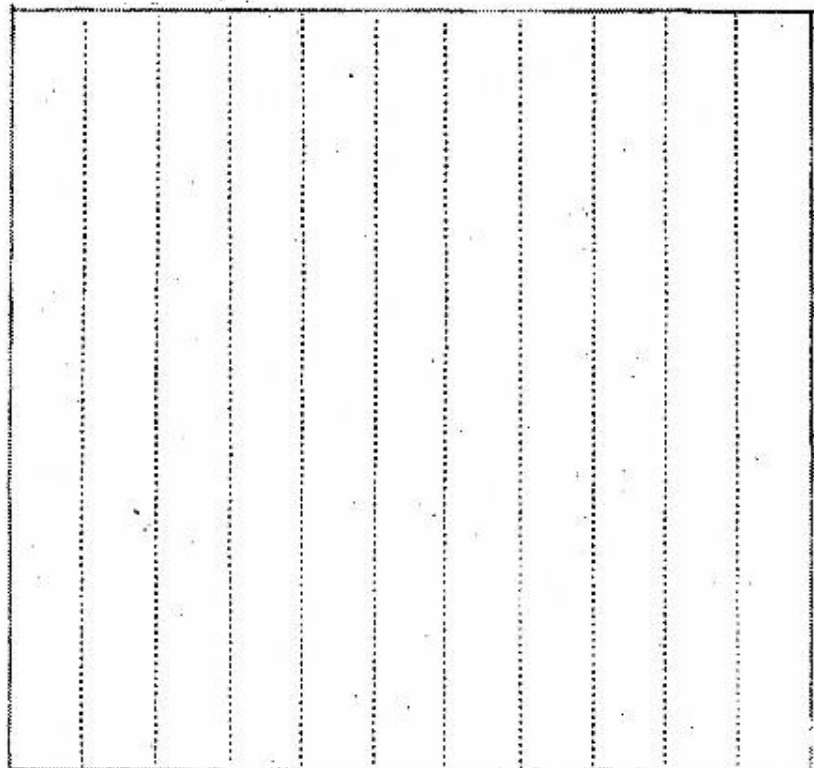
御伏の方々は、岩倉石大臣、木戸内閣顧問、大久保参議等の随員であつた。当日、天皇は赤坂の仮寓居を御出発になり、千住にて御昼食を召とつてから、本原に入り草加宿の大川跡惣右エ内氏宅に御泊りになった。

當時の参事長、白根多助は御宿泊所に軒うかがいし、祝辞を申し上げて、崎玉環地築路、同原沿根極などの縁を差上げた。

その翌日、天皇は草加宿を御出発になり、埼玉村の舟籍をの標子を御覧になり、船宿で御昼食の後、幸子宿の知ス又藤氏宅に御入りになった。

(注) 大川氏宅には今でも、明治天皇が御泊りになった跡が、そのまま現存している。

以上 草加の歴史より。



草加駅市神明宮 (出典下記の通り)

神明宮は、神明神社とも呼ばれ、草加藩の北の出はずれ松並木に入る地点にある。直線街道筋の宿場は、わざと曲折させて、鬼居しを要くされてあるが、神明社はこの屈指点に在る。

神明社は、草加藩聚の鎮付であると共に、草加宿は古くより「当宿は、一万坪の地子宛并はられ、もとは百日に収夫廿五人、駅馬二十五匹を出す定めなりしが、享保十三年より数を増し、五十人、五十匹を定数とせらる。

家数九ヶ村を窺て※五百五十九軒・当所に毎月五十の日市ありて近村の民、専り交易」と (新武、關土記稿)

する市場であったことから、宿家神社であることは市神神社としての根柢も受けていた。

明治となり、時代の急変から町制はなくなり、必然的に近隣の中心性格は失われ、市場も町支配から離れて同化されるに及ぶが、社の力は急速に衰えた。

以下 下段につづく

新王研究 第十四号掲載

草加市教育委員会社会教育課長

佐藤 久雄

(越谷市郷土研究会理事)

このように折、明治四十二年、氷川神社を中心にして各社の合祀が行われたため「氷川神社が草加神社」と改命名。され、草加の中心社としての働きは、神明社は全く失ってしまった。

註 ※上段九行目「却て」は「すべて」と読む。語源中国語では「よ」「で」みなどで、全部で、の意である。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--